

パスカルと歴史

広田昌義

《歴史なきパスカル Pascal sans histoire》。今はないフランスの文芸批評家、アルベール・ベガンは、彼のパスカル論 (A. Béguin, *Pascal par lui-même*. Ed. Seuil, 1952) の一章をそう題した。発展としての歴史、真理への歩みとしての人間共同体のプラクシスに関する考察が、ブレイズ・パスカルの『パンセ』一卷の中に見出すことができないというのがベガンの意見である。原罪による墮落以来、人間の条件が不動のものであると考えるパスカルは、たとえば聖アウグスチヌスの歴史観——人間の歴史の進行が、神の真理への道程として把握される——とは対蹠的な立場にあり、このいわば歴史感覚の欠如が、『パンセ』の現代的意義を問う時に、ひとつの欠落部分として眼に映るのだとベガンは言う。

ベガンのパスカル論、とくに《歴史なきパスカル》の一章は、おそらく今まで書かれた数多くのパスカル論の中でも、もっとも高い凝縮度と透明性をもつもののひとつであろう。彼の用意周到にして精緻な論旨には、まさしく針でついたほどの欠点も見出せない。しかし、「歴史」の概念をどのようなものとして考えるか、という点はおそらく問題となりうるであろう。私はベガンの所論を反駁する意図はまったくないが、ある読み方をすれば、パスカルの『パンセ』の中に、ひとつの「歴史意識」が見出せるし、この「歴史意識」は、『パンセ』という世界が構築される際の基点

になっているのではないかと考えている。

1

たしかに、パスカルの『パンセ』の中には、発展的歴史観はまったく見出せない。そのパスカルが、フランスにおける《進歩の観念 *Idée du progrès*》の創始者ともみなされているという奇妙な事実は指摘しておくべきであろう。パスカルが28歳頃(1651年頃)に書いたと推定される『真空論序言』には、人間の科学的認識の分野における発展的歴史観が強く主張されているのである。スコラ自然学からの脱却の宣言である、この小篇において、パスカルは自然学の分野で古人に与えられている権威の不当性を論難し、人間精神の進歩を次のように強調する。

《これ〔古人の意見の尊重〕は、人間の理性を不当に取り扱い、それを動物の本能と同列におくことではあるまいか。なぜなら、そうすることによって、本能はつねに同じ状態にとどまっているのに、理性の結果はたえず増大するという、両者の主要な差異を除去してしまうからである。蜜蜂の巣は千年前も今日と同様に正確に計算され、それらのおのおのは、最初の時も最近の時と同様に厳密な六角を形づくっている。〔……〕無限のためにのみ生まれた人間は、

これと同じではない。彼はその生涯の初期においては、無知の中にある。だが、たえずみずからを教育して、進歩していく。なぜなら、彼は自分自身の経験からばかりではなく、先人の経験からも利益を引き出すからである。〔……〕そういうわけで、人類は今、古代の哲学者たちが現代まで生き残っていたとしたら、彼らの持っていた知識に彼らの研究が長い世紀の助けによって得たであろうものを付加したと思われるような状態にある。そこで、格別な特権によって、一人一人の人間が、日々に学問に進歩するのみでなく、全体としての人類が、宇宙が老いていくにつれてたえず前進するのである。〔……〕そういうわけで、長い世紀の過ぎゆく間における人類の経歴は、つねに生存し、たえず学んでいく一個人の人と同様にみなすべきである。〔……〕われわれが古人と呼んでいる人とは、じつは万事に新人で、本来は人類の幼時を形づくっていたのである。そして彼らの知識に、その後の世紀の経験を付加したのがわれわれであるから、われわれが古人のうちに尊敬しているこの古代性を見いだしうるのは、じつはわれわれのうちにおいてである。》(中央公論社、世界の名著『バスカル』p. 455~p. 456。以下のバスカルの引用は同書により、一部改訂を加える。)

人間の自然科学的認識の発展について、バスカルが示している、このような希望と誇りに溢れた思想、人類全体を一人の人間と見たてて、その認識の無限の発展性を認める思想が、1657年頃からその大部分の断章が書かれはじめたと推定される、『パンセ』の中に見出せないことはある意味で当然のことである。『パンセ』は、バスカルが構想しついに未完に終わった「キリスト教弁証論」のための覚え書によってその大部分が構成されてい

るのであるが、その中心思想のひとつは、自然の認識は人間に幸福を与えるものではなく、超自然の認識が人間の究極的かつ唯一の目標でなければならぬというところにある。そしてこの超自然の認識が可能になるのは、啓示、すなわち旧約・新約の両聖書、中世の教父たちの神学、そして奇蹟を通してのみである、とバスカルは述べる。引用した『真空論序言』の中において、すでにバスカルは歴史的発展が認められるのは、《幾何学、算術、音楽、自然学、医学、建築学など、実験と推理のもとにあるすべての学問》の領域に限られるとしており、《歴史とか、地理とか、言語とか、とりわけ神学とかいうような》分野では事情は異なり、とくに神学において新説を生み出そうとする人々を、《無謀》、《高慢》と極めつけている。それゆえ、いわば広義の《神学》がその中心テーマとなっている、『パンセ』の中に、進歩の観念が見出せないことは当然であるとも言えるのであろう。しかし『真空論序言』の中でバスカルが強調した、自然科学的認識の進歩についても、『パンセ』におけるバスカルは明らかに否定的である。

《人間の本性はいつでも進むものではない。進むこともあれば、退くこともある。〔……〕世紀から世紀にわたる人間の発明も同様に進む。世の中一般の善意と悪意についても同様である。〔……〕》(断章・355)。

《自然は〈往と還〉の進み方で動く。それは往っては戻り、ついでもっと遠くに行き、ついで二倍も少なく、ついで今までかつてなかったほど遠くに行く、等々。

海の上げ潮は次のように行なわれ、太陽は次のように進むかに見える。VΛVΛV》(断章・356)。

この二つの断章で語られているのは、自然

nature (人間の nature と外界の nature) の運動様態であるかのように見えるが、パスカルは、《世紀から世紀にわたる人間の発明 inventions も同様に進むという一句を挿入することによって、人間の知識の歴史も、この考察に包摂されていることを暗示している。ここには『真空論序言』におけるパスカルとは明白に異なった立場が示されているのであって、進歩の観念、人間の認識の発展の歴史という思想はその影をひそめてしまっている。

そしてまた、いつも進むものではない。進むこともあれば退くこともある》という現象は、単に自然の運動と人間の知識の歴史についてのみならず、人間の社会の歴史についてもまた同様であるとパスカルは考え、《世の中一般の善意と悪意についても同様である》という一句を付け加えている。

このように、〈往・還〉を繰り返している自然の運動に重ね合わされるものとして、人間の知識と社会との歴史を見ているパスカルの視点が、現実の科学的研究と社会的実践の外部に、そこから離脱したものとして置かれていることは明白であろう。『真空論序言』が書かれたと推定される 1651 年と、パスカルが「キリスト教弁証論」の構想にとりかかった 1657 年頃との間には、1654 年 11 月 23 日夜半の、超自然的体験がある。パスカルは生前この神秘的体験について語ることができなく、死後、胴着に縫いこまれていた羊皮紙の「覚え書 Memorial」によって、神の現存との直接的触れ合いがそこにあったと推測されるのであるが、この体験はパスカルの世界認識を一変させたのであった。このいわゆる「決定的回心」後のパスカルの眼には、自然科学の分野における人間の認識行為が、無限の宇宙の中の有限存在という、人間の規定性自体からいって、まったく無意味なものとして映ることになる。《無限の空間の永遠の沈黙は私を恐怖せしめる》という有名な一句が

表白しているのは、人間の認識能力の無力さが、自然科学的探究を予め限界づけていること、そして人間の本性に内在している、無限と絶対への欲求は、自然の研究によっては決して充たされないこと、この二つの確認である。

また、人間たちの構成する地上の社会について言うならば、それは《バビロンの川》であり、《肉の欲、目の欲、生命の誇り、〈官能欲、知識欲、支配欲〉のみで充満している世界であり、《気違い病院》と呼んでもさしつかえない。このような社会の歴史的発展をまったく認めえないという立場から、パスカルは《最大の災いは内乱である》と説き、《世襲の権利によって相続する愚か者》にも服従して、既存の秩序と平和の裡に生活すべきであると主張する。パスカルにとって、それは単なる体制受容 conformisme ではなく、《人間を罰するために、これらの愚かなことに彼らを服せしめられた、神の秩序に従う》という真のキリスト教徒の義務であった。

こうして、人間の認識の歴史における進歩の観念は否認され、人間の社会についても、この《バビロンの川》の流れは、《時代が変わるにつれて習俗や信仰が定めない奇怪な種種相を示す》だけで、ひとつの方向性をもつ歴史の軌跡を描くものではないと考えられることになる。

2

パスカルにとっては、《バビロン》(世俗世界)の歴史はまったく興味を惹かなかった。旧約聖書だけが、彼にとってはキリスト以前の人類の歴史のすべてであって、彼が旧約聖書による人間発生の年代を頭から信じきっていたことは有名である。1658 年に出版された、『中国史』に、ノアの洪水以後の人類の世界への分散以前に、中国の王朝が初まって

いと記されているのを読んで、バスカルは次のように書く。

《中国史。

証人がそのために死をも許さないような歴史のみを私は信ずる。

[二つのうちどちらがいつそう信じられうるか。モーゼか中国か。] [……]》(断章・593)。

バスカルにとっての歴史は、キリスト生誕前にあっては旧約聖書、そしてそれを伝承してきたユダヤ民族を意味するだけであった。

《天地創造と大洪水は過ぎ去って、神はもはや世界を破壊することも、それを再び創造することも必要でなくなったので、とくに形づくられた一民族を地上に設けはじめ、メシアがその霊をもって形づくられる一民族の興る時まで、彼らを存続させようとなされた。》(断章・621)。

《世界の創造が過去のこととなりはじめたので、神は一人の同時代の歴史家を備え、一民族に彼の書物の守護をゆだね、その歴史が世界でもっとも純正なものとなり、全人類がぜひとも知るべき一事をそれによって学ぶことができるように、それによらなければ知ることができないようにされた。》(断章・622)。

バスカルは、キリスト教の真理性——すなわちキリストの神性——の証明の手段として、旧約聖書に記されている、メシアに関する多くの予言を参照する。そしてまたユダヤ民族の歴史の注目すべき特質——同胞民族であること、最古の民族であること、もっとも古くもっとも完全な法体系を有していること等々——を指摘する。

このような、キリスト教の真理性論証を目

的として、歴史的事実を参照する行為には、それがただ操作的な手続きとして行なわれている場合、「歴史意識」を認めることはできないであろう。ベネデット・クローチェ Benedetto Croce が言う通り、《現在の生の関心のみこそが人を動かして過去の事実を知ろうとさせることができる》のであり、《したがって、この過去の事実、それが現在の生の関心に一致結合されているかぎりにおいて、過去の関心ではなく、現在の関心に答えるのである》。とするならば、現在の関心に衝き動かされて、過去の事実が新たな生命をもってわれわれの内部に蘇り、この新たな意味を与えられた過去の事実が、現在の状況を照明してそこに明確な意義を現出させ、このようにして把え直された過去の事実と現在の状況との間に、ひとつの関係が確立されること——そこに「歴史意識」があると言うことができるであろう。このような「歴史意識」の発生と展開が、バスカルの『パンセ』一卷の中に見出せないであろうか。私が考えてみたいのはこの点である。

3

ルイ・ラフュマ Louis LAFUMA の綿密な考証によって、いわゆる第一写本（フランス国立図書館に収められている、『パンセ』の写本、B. N. f. f. n. 9,203）が、バスカルの死後、彼の部屋から発見された断章の記された紙片の山を、あるがままの状態、すなわち積み重ねられていた紙片の順序をそのままに再現していることが、ほぼ明らかにされた。この考証によって、バスカルは生前1,000に近い断章のうち約400を分類して、「キリスト教弁証論」の骨組をつくりあげていたこともほぼ確実になった。しかし第一写本によって明るみに出された、もう一つ重要な点がある。それは、バスカルが「キリス

ト教弁証論」に取り組む直前に構想していた、「奇蹟についての手紙」の下書きの諸断章が、ひとまとめになって、第一写本の末尾におかれているという事実である。つまりこの部分に集められている約 80 の断章は、パスカルが「キリスト教弁証論」の執筆を開始する前夜へとわれわれを導いてくれると考えられるのである。

パスカルは 1656 年 1 月以来、パンフレット『田舎の友人への手紙』Provinciales によって、ポール・ロワヤル修道会とイエズス会との対立抗争に参加し、ポール・ロワヤル会側に立ってイエズス会を攻撃していたが、同年三月、彼の姪のマルグリット・ペリエ Marguerite Périer がポール・ロワヤル修道院に安置されていた「聖荊」に触れて、重い眼病が快癒するという「奇蹟」が起きた。この奇蹟は、イエズス会ならびにそれと癒着していた国権の迫害を受けつつ戦っていた、パスカルならびにポール・ロワヤル修道会にとっては、精神の大きな支えとなるものであった。神自らが、奇蹟によって、ポール・ロワヤル側に真理があることを示したと考えられたからである。これに対してイエズス会側は、奇蹟は悪人を改心させ、誤謬の中にいる者に自らの誤りを悟らせるために起こることがあるという論法によって対抗した。パスカルは、このイエズス会側からの反論に対して、『プロヴァンシアル』執筆を続けつつ、「奇蹟についての手紙」を構想したのである。しかし、状況はますますポール・ロワヤル側に不利になり、一方においては官憲の追求が厳しくなる（『プロヴァンシアル』は匿名かつ秘密出版であった）と同時に、ローマ教皇もジャン・セニウスの著書『アウグスチヌス』の中に含まれているとされる「五箇条命題」（これに対するイエズス会側からの攻撃が論争の発端であった）の再度の異端宣告を行なうにいたる。真理が自らの側にあるという強い確信を

抱いているパスカルは、強まってくるイエズス会側の強権的圧力に対して次のように書く。

《私は三万人に対する一人なのか。否。あなた方は宮廷を守れ。あなた方は欺瞞を守れ。私は真理を守ろう。それが私の力のすべてだ。もし私が真理を失えば、私は滅びる。私には非難と迫害が絶えないだろう。だが私は真理をもっている。》

《あなた方もやがては真理の力を悟り、それに服するであろう。》（断章・921）。

この断章は 1656 年 11 月に書かれたものと推定されるが、「奇蹟についての手紙」の諸断章に含まれ、1656 年 11 月～12 月初旬に書かれたと推定される、ひとつの断章の末尾に、次のような一句が見出される。

《われわれは疑いもなく、聖アタナシウスと同じしるしを有している。》（断章・840）。

聖アタナシウスは、四世紀のアレキサンドリアの司教であり、当時勢力の強かったアリウス派の異端（キリストの神性を半ば否定する）と争い、多くの迫害を受けながら、正統の信仰を守り通した聖人である。また当時の教皇が、アリウス派の命題のひとつを認めこれに署名したことも想起してよいであろう。パスカルは、イエズス会ならびに教会権力（教皇）・国家権力（宮廷）によって迫害を受けている、ポール・ロワヤル派を、聖アタナシウスと重ね合わせて考えているのである。⁽¹⁾

パスカルはまた、同じく「奇蹟についての手紙」のための一断章に、次のように書きつける。

《人がもし伝承に従わず、教皇だけをもち出し、教皇を欺き、そうして伝承という

真理の真の源泉を除外し、伝承の受託者である教皇に偏見を抱かせ、そのためにはや真理が現われ出る自由をもたない時、その時人々がもはや真理について語らないので、真理が自ら人々に語らなければならない。これはアリウスの時代に起こったことである。

ディクレティアヌス治下の、アリウス時代の奇蹟。》(断章・832)。

「奇蹟についての手紙」の諸断章には、このほか、旧約・新約聖書の中に記されている奇蹟、その他歴史に現われる奇蹟の事例についての言及がなされているが、バスカルは彼が当時おかれていた状況を、歴史的諸事実に照合することによって、自らの立場の真理性を証明しようとするのである。

「奇蹟についての手紙」は完成されなかった。一方、迫害はますます激しくなり、1657年3月、ジャンセニウスの異端を認める「信仰宣誓文」に、フランス全土の聖職者が署名をすることが決定された。同年5月、バスカルは第18の手紙をもって、『プロヴァンシアル』の執筆を中止する。同年9月、ローマ教皇庁は、『プロヴァンシアル』を禁書目録に加える。この有罪宣告を知ったバスカルは、次のような叫びを上げる。

《沈黙は最大の迫害である。聖徒たちはけっして沈黙しなかった。神の召命が必要であることは事実であるが、人がはたして召されているかどうかを知らせてくれるのは、会議の裁定ではなく、語らざるにはいられないということである。ところで、ローマ(教皇)がすでに言明し、彼が真理を有罪に決したことが分かり、それが記録され、それを反駁した書物が非難された今となっては、不当な非難をこうむればこうむるほ

ど、われわれはますます高く叫ばずにはいられない。》

《もしこれらのものが黙るならば、石が語るであろう。》

《主イエスよ、私は汝の法廷に上訴する。Ad tuum domine Jesu tribunal appello。》(断章・920)。

この苦悩の叫び——教会の首長である教皇は地上における神の代理者であるという教義にバスカルが全面的に忠実であるが故に、彼の苦悩はより深刻なものとなる——が示している状況は、バスカルが死にいたるまで変わることがなかった。彼の死の前年、1661年には、前に触れた「信仰宣誓文」の署名を強制されて、ポール・ロワヤル修道会内部にも意見の対立が起こり、バスカルの妹ジャクリヌは心痛のあまり死去し、バスカルも議論の席上興奮の極に達して卒倒するという悲劇的な状態にいたるのである。『パンセ』の断章の大部分は、このような状況の中で「キリスト教弁証論」のための草稿として書きつがれていた。

4

「奇蹟についての手紙」の断章の中で、聖アタナシウスとアリウス派という、四世紀の教会史上の一事実が、現在との関連において想起されていることを私は指摘した。この歴史的事実の想起を、バスカルの「歴史意識」の萌芽と見ることはできないであろうか。というのも、現在の状況と過去の事実とのこのような照合は、「キリスト教弁証論」のための諸断章の中で、より包括的な形で現われてくるからである。

バスカルは、「キリスト教弁証論」の重要なテーマのひとつとして、ユダヤ民族の歴史をとりあげるのであるが、ユダヤ民族とユダ

ヤ民族が伝承してきた旧約聖書——メシアについての予言——との関係を次のように述べている。

《メシアが信じられるためには、それに先立つもろもろの予言が存在しなければならなかったし、またそれらの予言が、疑惑のかからない勤勉で忠実でかつひじょうに熱心な、しかも全地に知れわたった人々によって伝承されなければならなかった。

すべてこれらのことを成熟させるために、神は肉の民族を選んだ。そしてメシアを救い主として、またこの民族が好む肉の幸福の授与者として、予告するもろもろの予言を、この民族に託した。

そこでこの民族は、その予言者たちに対してひじょうな熱意を抱き、彼らのメシアを予告する、それらの書物を全世界の眼の前にもたらし、すべての国民に向かって、メシアは来臨するはずである、しかもそれは彼らが全世界に公開しているそれらの書物の中に予告されているようなしかたにおいてであることを断言した。》(断章・571)。

パスカルがユダヤ人を肉の民族と呼ぶのは、ユダヤ人が、旧約に予言されているメシアを、地上の君主としてのみ理解し、ユダヤ民族に現世的な栄光を与えるために来臨すると信じていたからである。メシアをそのようなものとして理解したが故に、ユダヤ民族は旧約聖書を保持伝承することができたのである。と同時に、パスカルは《古い律法のキリスト教徒であった、霊的な人々》がユダヤ民族の中に存在していたことを指摘する。この《霊的ユダヤ人》によって、旧約の予言の真の意味が見失われることなく、伝承されてきたのである。すなわち、旧約の予言が伝承され、それがキリストの神性を証明するもっとも重要な論拠となりうるためには、伝承のた

めの外的・物質的条件を担ってきた肉のユダヤ人と、内的・霊的意味を担い運んできた霊的ユダヤ人という、二つの相反する存在が、相方共に不可欠であったのである。この相反する二面性がユダヤ民族の特質となっているために、パスカルは、ユダヤ民族について、《肉的》であり、《富と貪欲でいっぱいになっており》、《世俗的なことを考えつつ》《肉の迷妄の中で年を重ねている》が、しかし同時に、《純真であり》、《偉大であり》、《特別な敬意をいだかざるをえない》民族である、とまったく相反する形容をしている。

ユダヤ民族についての、パスカルのこの考察を、歴史という一般的なレベルに移項してみるならば、相反し、相拮抗する二要素——正の価値と負の価値——によって歴史が形成され、歴史的真理が持続されていくという、いわば歴史の構造が明らかにされているということになるであろう。事実パスカルは、ユダヤ民族と旧約聖書に関する彼の考察が、単なる特殊の・特定のなものではなく、より一般的な歴史的事実であることを明確に意識していたのである。彼は次のように述べている。

《それぞれの宗教における二種類の人々。異教徒のあいだでは、動物の崇拜者と自然宗教の範囲内の唯一神の崇拜者。ユダヤ人のあいだでは、肉のな人々と古い律法内のキリスト者であった霊的な人々。キリスト者のあいだでは、新しい律法内のユダヤ人である俗悪な人々。》(断章・609)。

この断章で述べられている、歴史の諸段階にあってつねに相反する二つの勢力が存在しているという認識は、『パンセ』の多くの断章で語られている。たとえば、《イエス・キリストのことばを聞いた人々には二つの派があった。〔……〕カルヴァンの時代にも二つの派があった。… 今ではジェズイットその

他がある。》(断章・840)。

「奇蹟についての手紙」の断章の中で、イエズス会(ジェズイット)とポール・ロワヤルの対立を、アリウス派と聖アタナシウスの対立に比して理解した点に、萌芽として現われたパスカルの「歴史意識」は、「キリスト教弁証論」を執筆していく過程で、ユダヤ民族と旧約聖書との関係について考察するに至って、教会の歴史(これはパスカルにとっては人間の歴史である)全体を覆いつくす、ひとつの明確な歴史観となったように思われる。

パスカルの、このような歴史観から、『パンセ』全体に現われている、彼の人間観・社会観・宗教観の根底を成している、「表象としての世界とその解読」という思想が生み出される。すなわち、相対立する二要素が指抗して歴史を形成しており、この正と反との対立はすべての時代に存在する、いわば歴史の構造であると考えられた時、実体論的な世界像に代わって、《表象するもの figurant》と《表象されるもの figuré》とによって構成されている、《表象の世界》が現われるのである。いうまでもなく、真理を求める人間の永続的な営為は、《表象するもの》を越えて、《表象されるもの》に到達しようとする努力でなければならないが、しかし重要なことは、この努力自体が、《表象するもの》と《表象されるもの》の対立が存在する故に成立しているという点であろう。

以上のように考えるならば、《私は真理を守る。あなた方は欺瞞を守れ》という叫びに端的に表明されていた、パスカルの信仰上の矛盾は、彼の「歴史意識」を媒介として、ある解決に達したということができようであろう。それゆえパスカルは、《教会の歴史は、本来、真理の歴史と呼ばれるべきものである》といきることができたのであり、そしてまた、次の断章に現われているような、透徹した世界観を構築するに至ったのであると思われる

る。

《これらの諸矛盾のみなもとは、イエス・キリストにおける神人両性の結合である。

また二つの世界、新しい天と新しい地との創造、新しい生命と新しい死、すべてのものは二重であって、しかも同じ名称をもっているのである。

さらに義人のうちにある二人の。

それらは二つの世界であり、イエス・キリストの肢体と影像であるから、したがって、あらゆる名称が彼らに適合する。義人と罪びと、生ける死者、死せる生者、選ばれた者と捨てられた者、等々。

であるから信仰と道徳について、あいまいないように見えながら、じつは驚くべきひとつの秩序においてことごとく共存する、きわめて多くの真理がある。》

《そして普通ありがちなことは、対立する二つの真理の関係を理解しないで、一方を容認することは他方を除外することであると信じ、一方に固執して他方を排斥し、われわれを彼らに反するものである⁽²⁾と考えることである。》(断章・862)。

5

『パンセ』の内的統一性は、歴史と世界の構造理解というパスカルの視角にあると私は考える。そして、この視角が生み出される経過の中に、ひとつの「歴史意識」の現出があり、その「歴史意識」が視角自体を規定していると思われるのである。パスカルの、この「歴史意識」は、アルペール・ベガンのいう人間共同体のブラクシスとしての歴史、「聖

者たちの共同体」をその究極的な目標として発展していく、歴史とはその内容を異にする。ベガンのいう意味での歴史は確かにパスカルの『パンセ』の世界には現われない。しかし、あらためて、「歴史とは何か？」という疑問が心の中に浮かび出るのは私を感じる。ベガンのパスカル論は、1952年すなわち、第二次大戦後5・6年を経た時点で書かれた。この時代の精神が、ベガンのパスカル論にも強く刻印されているように思われるのである。

今日、「歴史」という言葉によって理解されるものは、この小論で述べたような、パスカルの歴史観にひじょうに近いもののように思われる。ベガンの言葉をもじれば、われわれは「歴史なき時代」に入りこみつつあると考えるのは誤っているだろうか？

注 1. cf. 断章・868.

注 2. cf. 断章・863, 865, etc.